畫圖西遊譚
肆

書名 畫圖西遊譚
全五冊之内
第四巻
年 月 日
第 號

西遊旅譚巻之四

十一月十四日長崎を發して三里時津に至る十五日朝船に乗風雨波のあらし大村領亀浦といふ小島にかかる程なく船を出して又小串といへる小嶋にかかる大串島有船より出海岸をあらす此岩石雲母あるよし此故大風雨あらし故に泊して十六日巳の刻此船を出して六里を走平戸領針尾瀬戸に至る右ハ大村領左ハ平戸領なり地の辨天沖の辨天あり此半里程の中山入組齟齬して潮岸岩岸に觸波あらして此雲珠捲をなし誤て乗入バ船忽沈むと又海底岩石抜出る

水ハ白波飛で沸湯のごとし潮満て船を
余干潮にハ乗

向所ハ長崎の方なり
沖ノ弁天

平戸城下勝青山ヨリ眺タル圖

カク
ハラ
小川
シマ
呼コ
ミサキ
嶋

小鯛浦之図

則針尾(はりを)の瀬戸を越て小鯛が浦
といふ小島にちかよるに船をかける
又ほどなく大鯛が浦に船を留(よど)め
て是秋丑の刻比東風に帆
をあげ九十九島の内牛(うし)が首(くび)
などいふ島々を見つゝ走(はし)る事十七
日四時(よつとき)あまり平戸島に着(ちやく)
岸(がん)す此平戸(ひらど)城下廻船(くわいせん)数(す)
十艘かゝりてあり鮪(しび)(まぐろ)〔西国(さいこく)にてはしびといふ 大坂にてはハツといふ〕

江戸まて マグロと云を積(ツミテ)たる船ありて發(バツ)して冬月時雨(シグレ)の風あて帆(ホ)を

もりて玄界灘(ゲンカイナダ)をすぎて下の関よりはる夫より防州灘(スハウナダ)

をこえて阿波(アハ)の鳴門(ナルト)瀬戸(ナリ)をわたり志摩(シマ)の國鳥羽(トバ)ノ

浦より伊豆の東海を経(ヘ)て七八日ありて江戸に来る事

小田原町より売出ス 又船中滞(トドコヲル)事なれバ塩(シホ)に漬(ツケ)ること殊に無(カ)子しほあり

鮪ハ伊豆よりし秋ころ漁するものハ三四尺のものなり
平戸よりし五六尺支那(カラ)南京よりしハ丈余甚毒なり

此魚煖土(ダンド)にして橙(ダイ)ザボン

ダイノ二十倍ナリ 多し雪(ユキ)霜(シモ)稀(マレ)なり赤大根(アカダイコン)赤蕪(アカカブラ)なり菜茶をのめ

土瓶(ドビン)にて佳茗(ヨキチヤ)をいれて茶にせ蕪漬(カブラヅケ)をくり冬月にて

いつでも食事(ショクジ)四度(ヨタビ)にす

平戸城下観音院の堂内鐘は支那より渡りしと云へるた
真に支那物にて播州尾上の鐘と同物なりと思ゆる
観音堂には小松重盛の親書と云又阿部宗任か塚あり
昔は和蘭及イギリスより此島に船を着しより
園の屏今にあり石を重ねてチヤンを塗と云市街の
橋石を以て作る事長崎のごとし　昔西洋の人十二月廿三日冬
至を寺もの開基支那僧なる故今に此日を祠るの習
俗家にも及び餅等搗祝ふ

観音院堂内鐘之圖

阿蘭陀墻

聖護院御願所平戸島觀音院
奉施入鐘一口應永十二年未
十二月日と彫てあり

天人樂器を鑄せり

平戸城下より一里北の方白嶽なり行路坂をのぼり山に入
柴生して樹なし馬乃牧を放つ白嶽絶頂より大島宅
島眼下に見へ遥に壱州見ゆる又時に対馬も間より小峰
二つ三つ布太髪とて西北遥に朝鮮国岸まで見えわたり東
の方 斑島 唐津乃総地也 西の方日本の地なり 支那海より西より南壱
月島見えて西南にあたり安満嶽とて平戸第一の高山なり夫より
嶽をおりて田助浦に出る是より下関の方へ渡るに船を
かける港なり 方濟日本房州に漂流せし時長崎まで送る事の経路を一軸の図あり其巻中に平戸田助の港に泊して船中より見
の図なり余摸写して蔵しける余の図となる所て
山とより眺る景にして図中に画くものは鮪楼なり

薄香浦之圖
平戸埠下ヨリ一里
是ヨリ生月島ヘ
渡ル海上三里
田助浦
唐津山

東の方斑島アリ
北方
對馬
壹州
フタカミ
無人
大島亘二里人家七百余軒
宅島人家百余軒
横島
白嶽頂

朝鮮國
生月島亘三里西南ノ方ナリ
七島アリ
ヨシカ
左ノ方安マ島山嶽アリ
ヤスミシダケ

十二月四日朝風にのり城下より一里山を越薄香浦(ウスカウラ)に至り此浦より舟を出す舟人(カコモノ)五人にして櫓(ロ)をおし風なきを時をうつし折に須(ス)草といふ所の浦に入(イル)此所鮪納屋(シビナヤ)一軒あり其余人家なし又鮪漁(シビリヤウ)の船に乗て生月(イキツキ)島に渡る海上三里濤(ナミ)大にして舟中に入衣服を絞(シボル)日暮(ジツボ)漸生月島に着岸(チヤクガン)そこの島にとまる事二十日之

阿子貝(アコヤ)之圖
真珠(シンジユ)ハ此貝ヨリ出ル
此島の海中にもあり又伊勢の海よりもとる二見る者の達しまず
アハビノ如ク光ル

須草スグサ
此所ハ
城下の
後田助
の脇也
鮪納屋
須草より
のり出しける
図

生月島之圖 亘三里アリ

琵琶嶽

此所ヨリ後三崎ト云所鯨ヲ解ク所アリ

益冨宅

狹子嶽
遠見番所
那ノ支
松本ノ方
鮪見樓
鮪網

五日四時過より獅子ヶ嶽頂に
のぼる路は田夫の家より石を囲て
壁となし舎を作る廿町登りて
絶頂なる巓に至見る人
の曰一年両三度にある
西の方は暮色国と
見ゆるの節
支那の地也

猨、子ナ山嶽ニ登ル山中小童来ル図ノ如シ

此邊海中より龍の天に昇事あり龍昇んとすれバしきりに海波立て珠のごとく捲上り天より八黒雲降り其雲波とくつがへるまでど波高く吹あげ天上すると鱏といふ魚の尾のごときものか雲の中にさがる即ち鱏の尾なり故に此島の者は龍の昇るといはず鱏の尾と云漁父がのぼると云八日此島のうちある山のある所に鮪漁をする所あり鮪は秋月山しの岸を取りきたる故に山の際に網を布一網に二三百或四五百大漁の時ハ千も入よし

鮪網之圖

地ノ方
本網
百廿尋
沖之方
起網
是ハ底ヨリ
百八十尋
一尋ハ四尺ニ當ル
立櫓

鮪漁

鱅又タカマツ
鮪を
喰んと
氣ヲ吹
入勢

十三日此島（シマ）も煤（スヽ）拂（ハラヒ）して祝ふの日也四時（ヨツトキ）比鯨（クジラ）来るよしふされバ鯨船ども櫓（ロ）八艇（テウ）ありて矢のごとくはしる也風やハらかにして波乃うねりハ太山（タイサン）乃ごとし又鯨突（クジラツキ）羽刺（ハザシ）舟のへおどりてまはち四方を乗（ノリ）廻（メグル）にタカヘツ一名鯱（シャチホコ）潮（ウシホ）を吹き山に映（エイ）し煙（ケフリ）乃ごとしタカヘツ来るときハ鯨（クジラ）逃（ニゲ）去（サル）よしタカヘツハ則鯨を喰ふ魚なり鯨ゆゑしてなく故に舟を生月（イキツキ）にかへれバ舟中より西の方を望バ山々唐画のごとし

十六日早朝（サウテウ）鯨見ゆる直（タヾチ）に舟に乗て出けるに見れバ彼方（カナタ）此方（コナタ）に鯨の脊（セ）を出し氣（キ）を吹をみる

夫より舟ハ鯨の見ゆる方へ追て走る尤平戸島と生月島乃間の海より鯨いづるときハめしるしを見れバ舟々と生月島の方へ追らんとする時より舟々着きし大島乃沖より一艘の船より鯨くらん銛とら川旗をさし出せバ四方の舟鯨の方におしむかハんとこぎよする十艘ばかりなり追よせ鯨をかりよせむる凍り巨魚乃大洋海をこし飛動するとみるに波濤山のごとし舟々余の乗し舟と三崎よりつれはなるゝ日暮て初更過なり岩石を揺波の音と叫び声祝して

三崎ハ鯨を切解所にて居所より一里ばかりの方也

鯨漁之図

鯨頭を出し海より
あがれる潮を吹別
夫ぞうつ〳〵魚銛を
投気を吹絶れは尾
を出し波を打て海
底へ入

鯨舟ハ二十艘を出す
是を勢子(セコ)舟といへる又
網舟を出し雙海と
名づく
一結(ヒトムスビ)といふハ網舟二艘に
邂(カヽヱ)舟三艘あり此をもつて
三結を出し三結ハ皆て
六艘網舟ハ大船なり
是網を積故なり

頭より出し潮を噴しける鐱鯨を殺さんと投りかけ弱くなりたるを
鯨潮を吹けるほど出るまで殆の吹けば其一人の若者海中より
飛入鯨の脊にのぼりその脊を穿大綱を曳透しける鯨ハ又
波を切り海底へやらんとしけるに多くもものども脊より
跳あがりしく又一人の者ハ大綱を持 波の底より鯨の腹の下辺
旋出けれより舟二艘に柱を渡しめて鯨を挟みて舟より
引舟として岸の方に近く是を 鯨更にまた弱りしてし
共倶に鰭をうごかして潜るまる中も死しけれハ沈没して岸
よりあるの手形を刺したるを鯨をけひかりして鐱を刺挿し

魚䝋(モリ)之圖 又ヨロヅトモ云 此製生鐵(ナマカネ)ニテ作(ツク)ル 鯨ニ刺入(ウチコミ)綱(ツナ)ニテ引(ヒク)なり

半(ナカバ)より曲(マガル)

四尺五寸

柄トモニ長サ九尺

同ハヤトモ云

此形(カタチ)のものハ鯨ニ投刺(ナゲツク)具(グ)なり

柄共ニ一丈三尺余

剣(ケン)之圖

三尺餘

鯨を殺(コロス)具(グ)也

鯨を圍(カコム)圖
鯨見
網ハ山
ケイヲ
間ニ入ル
ケイ
アミ舟

三崎鯨ヲ切解所ナリ
鯨二ツ連レ
吹潮勢
入勢
舟バタヲ叩テ鯨ヲ追フ
旗ヲ以テ鯨ノ方ヲ招ク

夜半出し
鯨乃背に
のぼる

鯨番人

鯨切解圖 此所ヲ三崎ト云

鯨大腸を剪とき鑷

又ニ竹解の奥らくて見ん

小海老といへるが臭気のて

又鯨鯢といふ

万力車捲ク 七ケ所ニ在

大綱をかけ捲きる

島見元

ライ島

肉納屋
腸納屋
骨納屋

此島にて所漁の鯨總五品あり

世美鯨 上品味美大なるものハ十間 油凡百樽を出す 柔くして肉多し

長須鯨 中品味淡く肉柔なりし頭ニ海上ニ浚入テ底ニ走ル

座頭鯨 中品少剛にして又身やせ味同ニ長須ニ

児鯨 下品剛梗にして滑かならず舟を破る

鰯鯨 下品味最も劣る鯨の名にして此鰯をあさる

右各象異也 予見所のものハ世美 座頭の二品なり其余ハ不見

一まいのひげ
鯨のひげとしるしたるハ
口中にある
歯のごとし
別ニエラ
なり
剪切て
人夫二三度にわたる
ベツタウト云者
人夫を差
圖する
もの也

座頭鯨
腹の方ウ子リ有
此ヘンコブ〱アリ
鰯鯨
世美

長須鯨

長須(ナガス) 坐頭(ザタウ) 腹子(ハラコ) 大サ九尺余

二生餌世美児鯨 腹子八寸より一尺五六寸

總て鯨は卵生(ランセウ)にあらず

子ともを生す 或は一疋なり

交(ツルミ)も總て人のごとしと云

長須腹方(ウラタチ)白し

児鯨 灰色にして 連銭文アリ

口中歯アリ 其余歯なし

阿蘭陀書中にウニコルの説あり

夜國の産ましし鯨魚のあやまり

青色灰色にして青き斑の紋ありといふ

児鯨ハウニコルノあやまりにや

口のまはりに白き鬚あり

鮪見樓
鯨見
魚集る時
樓の上より見付る者
旗と出す 立櫓の
舟に其印を見るとき
口網を引閉

鮪網
浮木
竹二本を

貝の色白し
切口
切口
白
骨なし

此牀貝ハ世美鯨の頭又尾鰭ニつく

此虫世美鯨にあり瀬貝の間に有り虱（シラミ）ト云

世美鯨乃鰭（ヒレ）又尾のさきに付牀貝なり

岩のセイと云ものゝ類貝なり海岸の石などに多く漁父とりて食ふし

貝の色白足（あし）のごときものと出る肉色にしてうす赤色なり

ひれ

是ハ七貝なり

肉納屋之圖
役人

竈十八ニテ油ヲ
煎を
筧もて庫
の内に儲ふ
鯨十間許の
もの油二百樽
と出る

骨納屋之図 又膓納屋あり
上腮の大骨
肋骨

骨を小く碎（クダキ）
油を煎ぞ

土佐の国にてハカレキ通と云
舟の底をつらぬく

此魚 アヽナレとも云又 カジキトヲシとも云

尾より頭目の所まて一丈余也

此魚ハ生月嶋益富より者の臺所に
鈎くあるを写す 正月の料理に用ゆるよし

脊の色鮪に似る
腹のカタ白し

ライ鳥

此鳥ハ常ニハあらず鯨漁(クジラリヤウ)の時
いづくよりか来りて
鯨の肉を喰ふ事甚し
うまくくとなうず
鷗(カモメ)ニ似て大サ白鳥(ハクテウ)
のごとし嘴(ヲカ)にかゝりて
ハ歩(アリ)ミ事あるらん

頭ハウス黄

觜(ハシ)生胭脂ウス色

サカマタノ歯 一名鯱(シヤチホコ)

鯨鯢を喰ふ魚也
予此歯を持来
試るに効あり

サカマタノ歯

此圖ハ此島山の漁父に尋ねて聞ん
海中に潮を吹巻を出したる所なり
見るまゝなれとも全體を見え
世美鯨と同く潮を二筋に吹く
くしらも世美の如く一筋に吹くと

タカマツ
一名シヤチホ
大サ二間余

丈に聳(ソビヘ)て赤壁(セキヘキ)と號(ウタカ)ふ鯨(コ)をとれば油水(アブラミヅ)とらつるにいへり
岩壁(ガンヘキ)赤し大赭石(タイシヤセキ)のあかり（画の色に用て可なり）此海岸を見て田助港(タスケミナト)に至る長崎より
乗舟此（田助にかゝる）夫より舟を出して平戸城下に着(ツク)

鯨舟旗(ハタ)乃圖
長須(ナガス)子持(コモチ)ハトモの方ニ建ル
勢美(セミ)のときハ船印を舟の表ニ建ル坐頭(サトウ)ハトモの方ニ立てる
皆旗の建やうにて鯨の品別を知るなり

白
白
白
紋牛の角なり

巻之四終